



Title	2023年安岡ゼミ修学旅行の報告：飯田・下伊那地域での出会いと学び
Author(s)	上垣, 皓太郎; 松江, 彩花; 草替, 春那 他
Citation	日本学報. 2025, 43-44, p. 104-110
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/101375
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【対話と方法】

2023年安岡ゼミ修学旅行の報告

—飯田・下伊那地域での出会いと学び—

松江 彩花・草替 春那・野村 琴未・平井 彩翔・上垣 皓太郎
(編集責任者 上垣 皓太郎)

はじめに

安岡先生のフィールドを訪ねてみたい、との学生有志の提案から、2023年の夏休みの終盤に、初秋の風さわやかな長野県南部の飯田・下伊那地域(飯田市・阿智村・松川町など)をめぐる修学旅行を行った。参加者は、安岡先生に加え、卒論ゼミを受講する松江、草替、野村、平井、上垣の学部4回生5人であった。指導教員である安岡先生の研究の背景を知り、飯田・下伊那地域の文化的土壌や、積み重ねられてきた市民による取り組みの厚みに感じ入る旅行となった。そこで、今回の旅行でお世話になったみなさまに宛てて参加者が後日書いた手紙を引用しながら、充実の旅行の様態を報告する。なお、本稿を含む『日本学報』が発行されるのは2025年3月であるが、本稿は2024年3月に執筆されたものであることに注意されたい。

1日目 市民と研究

9月28日(木)

昼・伊賀良 現地集合 13:07→25分遅れ

昼食 あすき そば

14:30 飯田市歴史研究所訪問と交流

(齊藤俊江さんのお声がけ)

羽田真也研究員による施設案内

歴史研究所所蔵資料の閲覧(齊藤さんご紹介)

村松孝子さん「飯田女性史研究会 15年のあゆみ」伊坪俊雄さん「満洲移民の聞き取りをして」

17:30 飯田市平和祈念館 原英章さん、伊坪俊雄さん
による案内・解説

18:30 チェックイン ホテルオオハシ

19:00 焼肉 ヤキニクコキンギョ

大阪からバスで4時間半余り、秋晴れの飯田市に着いた。安岡先生と合流してそばをいただいたあと、先生が2013年から2015年まで勤められていた飯田市歴史研究所に向かった。市立の歴史研究所は、国内でほかにほとんど例がない。吉田伸之は、自治体立の歴史研究所という画期的な取り組みが実現した飯田市側の文脈として、(1)文化的ストックの豊かさ、(2)市民の高いレベルの文化的関心、(3)飯田市政当局の文化的関心、見識の高さという3つの事情を挙げている〔吉田2015:115-117〕。現在は近世史、近代史、建築史を専門とする3人の研究員が研究に当たっているほか、廃棄されそうだった史料を市内の蔵などから救出し、保存する活動も行われている。一方で、書庫を見学した際、羽田研究員が、積みあがった史料を前に「資料はここではなく、本来あった場所にあるべきなんです」と語っていたことも忘れられない。

また研究所は、研究員が専門分野に応じたゼミを開いたり、一部の史料を閲覧できるよう図書室を開放したりと、市民による学びをすすめる機能も担っている。私たちは、図書館司書として地域に生きてきた齊藤俊江さん〔図書館問題研究会長野支部2023〕とお会いすることができた。その後、齊藤さんをはじめ5人の方々に、満洲移民関連や女性史関連などの、

市民によるオーラルヒストリーの取り組みについてうかがった。オーラルヒストリーに関して、聞き取りの2日前に亡くなった方が、資料のすみずみまで細かい書き込みをしてインタビューに備えていたお話が心に残る。「いましか聞けない声を聞く」ことのシビアさを実感する一方で、それだけ語りたいたい思いがある人がいること、また、その思いにこたえようとする人びとの取り組みが地域にとっていかに大切であるかが切に感じられた。日本学専修「コロナ禍の声を聞く」プロジェクトのメンバーでもある草替さんは、旅行後に研究所に宛てた感謝の手紙にこう綴っている。

研究所を見学させていただき、職員の方々のお話を聞く中で、地域の歴史を地域の人々の手で残していこうとする熱意に圧倒されました。オーラルヒストリーに関して、「語りたいたい」と聞いておかねばという思いの両方があるという聞き取りは完成する」というお話が印象に残りました。私にとって聞き取りは、単なる知識としてしか知らなかった歴史が、直接お話を聞くことによって鮮やかな色を帯びて眼前に立ち現れてくるような、充実した体験でした。一方で、聞き手として一人の人間の経験を受け止めることの難しさや責任の重さに戸惑うこともありました。しかし、聞き取りは聞き手による一方的な作業ではなく、語り手との相互作用によって成立するという話を聞いて、また新たな姿勢で聞き取りに臨むことができるように思いました(草替春那)。

もっとお話を聞いていたいと後ろ髪をひかれながら、飯田市中心部、いわゆる「丘の上」に向かった。飯田市平和祈念館は、市の教育委員会が運営していて、公共施設の一角の 200 m²足らずの敷地に設けられた、こじんまりとした展示スペースである。20 年以上前に市民から市議会に出された請願をきっかけに、2022 年に開館した。展示には、たとえば「アメリカ軍の攻撃目標リストの 177 番目には飯田が挙げられていた(実際には空襲されず終戦を迎えた)」とか、「阿南町などにあった防空監視哨で、青年兵士が耳をすまして飛行機の飛来を察知していた」といったように、地域に根差した記述が



図1 飯田市歴史研究所
(2023 年 9 月 28 日 上垣撮影)

多く盛り込まれている。展示資料の多くは民間からの提供によるもので、今回お話をうかがった原英章さん、伊坪俊雄さんも展示パネルの作成に関わられているが、「平和学習をする子どもたちをはじめ多くの人に、一面的でないさまざまな事実を知ってもらいたい」と話されていた。

特に時間をかけて説明していただいたのが、「731 部隊」に関連して、元隊員が持ち帰った医療器具を見ることができるコーナーである。本稿執筆に当たって調べたが、国内で 731 部隊に関して公共施設での展示をしている例はほかに見当たらなかった。このコーナーでは、731 部隊については研究途上にあり、社会的にもさまざまな意見が存在する点を断った上で、部隊で「細菌兵器の研究、開発、製造」が行われていたと認定した 2002 年の東京地裁判決を紹介している。これらの展示をめぐるのは、原さんや伊坪さんの所属する「平和資料収集委員会」が、オーラルヒストリーの手法で聞き取った元隊員の証言を詳細にまとめたパネルを展示しようとしたものの、市の教育委員会が展示を見送る判断をした。証言の中には、「私はマルタを 300 体解剖した」といった内容もあり、「部隊の解説については高次の研究・検討を要する」、「過激な展示にならないよう配慮してほしい」といった声も上がる中、展示内容を検討する委員会が設けられて議論が続いている [読売新聞 2023]。野村さんはお 2 人に宛てた手紙でこう綴った。

平和祈念館が維持、発展していること背景に

は、飯田の皆さまの歴史にたいする真摯な歩みがあるのだと思います。特に、731部隊の資料は今までに見たことがなく、こうした証拠となるモノがほとんど残されておらず、さらに証言をする人もいなくなりつつあることに、危機感を抱きました。また、展示の内容全体が飯田と戦争の関わりを描いていて、戦争の様々な実態を身近に引き付けて考える工夫がされているように感じました。最初に述べたように、私たちが戦争を知る術となるモノも人もなくなっていく中で、まず自分の住む場所は戦争でどうなったのか、ということを知ることが改めて大事なことですし、これだけの資料が集まっていることはその助けになると思いました(野村琴未)。

飯田市平和祈念館にいる間、私たちのほかに見学者はいなかった。もの寂しいリノリウムの床に、暗い歴史が重なって印象づけられた。この場所で、ともすれば歴史から抹消されてもおかしくないような証言を、残し、活用しようとする人たちがいることに強く感銘を受けた。飯田から東アジア史を見ることのできる時間であった。このように、初日から大ボリュームで、飯田に蓄積されてきた市民による歴史研究の厚みを体感した。夜は人口10万人当たりの焼き肉店の数が日本一多い「焼き肉の街」飯田の焼き肉を堪能したあと、学生は宿に戻ってから翌日の卒論研究会の準備を遅くまで続けた。

2日目 何をどう伝えるか

9月29日(金)

朝 朝食 宿

満蒙開拓平和記念館(阿智村) 見学

オープンは朝 9:30~

記念館での語り、証言についてお話を聞く

三沢亜紀さん

昼食 おにひら屋神店 そば・かき揚げ

午後・卒論研究会 @阿智村中央公民館 会議室2

宿 阿智村ゲストハウス みんなのいえ

入浴 湯ったりーな屋神

夕食 門前屋 月見うどん・そば



図2 満蒙開拓平和記念館
(2023年9月29日 上垣撮影)

東山道・園原ビジターセンターはき木館 そのはらの月見祭り前夜祭 琵琶演奏見学

2日目は、朝から隣の阿智村に移動し、満蒙開拓平和記念館を訪ねた。ここは2013年開館で、国内で唯一「満蒙開拓」に特化した展示を行う資料館である。満州移民を日本で最も送り出した長野県の中で、最もその数が多かったのが飯田・下伊那地域であった。満州における、被害や加害を伴う苦難の記憶は、この地に帰ってきた人たちにとってタブーとなり、封印され、長らく十分に顧みられずにきた。1990年代以降、世界的にも声なき人たちが語り始める中で、飯田・下伊那地域でも隠されてきた歴史が語られはじめ、1日目にお会いした齊藤俊江さんなどの尽力もあり、語り継ぎ活動が活発になる。こうした地域の営みを基礎として、特に「ポスト体験世代」の寺沢秀文の牽引によって生み出されたのが、この平和記念館である[山本 2021: 374-376]。

国産木材のよい香りが漂う、延床面積400㎡以上の本格的な建物の中には、文字で記された証言が読める展示スペースに加え、証言を映像で見ることが出来るスペースがあった。映像のもつ伝える力の大きさが改めて感じられ、具体的かつ詳細に語られるその証言は、はるかなリアリティで見者に迫ってきた。極寒の逃避行の末、わが子を道に置き去りにしたり、現地の中国人に預けたりしてきたと語る引揚げ体験者の口調は確かで、人ひとりの語り、だ

れかの心を揺さぶり、歴史への想像力を喚起することを改めて実感した。心がずっと揺れながら見学を終え、事務局長の三沢亜紀さんと懇談した。三沢さんによれば、ある引揚げ体験者の女性が、記念館で語り部として戦時性暴力をめぐる記憶を来場者に向けて詳細に語ってくれたという。そのため、三沢さんがカメラを持って彼女の自宅までインタビューに向かうと、夫の前だからか、一向にその話をしなかったそうである。後日三沢さんに改めて伺うと、「不特定多数を相手にした講話で話せることが、家族の前では、あの年齢になられてもなお語れない現実に打ちひしがれ、“語る言葉”以上に“語れない状況”からいろいろなことを考えさせられました」と、「語りづらさ」を実感したそのときの心境を教えてくださいました。

この懇談で、三沢さんは、「こんな歴史があったことを認めたくない、と思っている人にこそ知ってほしい」という思いで、さまざまな意見を参考に、より多くの来場者が受け入れやすい展示方針、言葉選びにこだわって展示していることを説明していた。たとえば、満州に渡った移民による土地の収奪についても、「収奪した」と言い切る表現を避け、「～もあった」あるいは「多くは～」としている¹。こちらも三沢さんに後日伺ったところでは、「主義主張ではなく、断罪や告発でもない。多くの人と一緒に考える場でありたい」という思いで言葉を選ばれているという。より多くの人に届く、伝わるとは何なのか——話を聞きながら、ミュージアムにおける展示のふさわしいあり方を考えることになった。豊中市の人権平和センターで平和に関する展示に関わる松江さんは、このような感想を三沢さんに送った。

戦争や平和に関する展示を色々に見に行ってきた中で、向き合うことがつらい内容もありつつ、ずっといたくなる気がする施設でした。素敵な建物だからなのか…なんでだろうとほんやり考えていたのですが、お話の終盤に三沢様が言葉選びをはじめとした伝え方に大変気を配っていらっしやると伺って、納得がいきました。

自己紹介の際少しお話させていただきましたが、私は大阪府豊中市の施設で、豊中空襲を筆頭に平和に関する展示に少し携わっています。地域の小

中学生に修学旅行の予習等で使ってほしいという思い、私自身平和学習でショッキングな展示に衝撃を受けてばかりでかえって内容自体を熟考できていなかった経験などから、(子どもに限らずどのような人にも、という意で) 触れる人に届く展示とはなにか少しずつ考えてきました。そのため、個人と国家、加害と被害などについて「考えることを学ぶ」、そしてその反復が歴史認識を形づくってきたという三沢様のお話を興味深く拝聴しておりました(松江彩花)。

私は、満蒙開拓平和記念館のあり方を、自ずと前日の飯田市平和祈念館と対照していた。満蒙開拓平和記念館は、飯田市平和祈念館より大多数のびとを対象にしているように見えた。大きな建物の中には見学者が多く行き交い、遠方からも修学旅行生が来て折り鶴を贈る。2016年には、当時の天皇皇后両陛下が訪ねていて、敷地には御製の歌碑が建立されている。そのあり方の基礎には、三沢さんのいう、より多くの来場者が受け入れやすい展示方針や言葉選びといった館の姿勢があるのだろう。こうした姿勢には、穏当で中正な表現を指向するあまり及び腰になるリスクがつきまとうし、「平和を念願する」といった大局的な理念に収束するだけになってしまう危険性もある。実際に山本めゆは、過去と対話する下伊那の歴史実践を高く評価しつつも、「満蒙開拓の教訓がいわゆる『反戦』へと横滑りしている」といった批判を提出している[山本 2021]。それでも、満蒙開拓平和記念館が「個」の経験や語りを重視していることで、あの戦争の中で生きていた1人1人が、何を体験し何を思っていたかに想像力をたくましくする余地は十分確保されているように思えた。2つのミュージアムの根底には、歴史の中の命ひとつひとつと真摯に向き合い、何をどう伝えていくかを考えていく精神が共通して流れているのだと感じた。

昼食のそば屋さんではかき揚げの大きさに驚愕し、次に阿智村中央公民館に向かった。社会教育の拠点として公民館の整備が進んでいた地域であるだけに、阿智村の公民館もかなり本格的な建物であった。会議室の一室をお借りして、学生5人が卒業論文の進捗状況などを発表し議論し合う卒論研究会を行った。夕方になっても研究会は終わらず、宿に行っても続いた。2日

目の宿はゲストハウス「みんなのいえ」で、同宿のスペイン人漫画家の男性と交流することもできるなど楽しい場所であった。ここでオーナーさんから阿智村の園原に残る源氏物語ゆかりの「帚木」伝説を教えてもらい、月見祭り前夜祭を見学に行くことにした。園原へのドライブでは、昼神温泉の入浴で男性陣が女性陣を待たせたのを埋め合わせるかのように、安岡先生が夜道を急いでいらしたのが忘れられない。私と安岡先生は月を眺めて長風呂をしていました。申し訳ありません。いまはゼミメンバーで飲み会をすると必ず話題にあがる楽しい思い出です。

園原から望む月は美しく、開けた空に撒いたように星が散らばっていた。車が何十台もとまり、訪れた人たちが寝転がって月を眺め、琵琶の演奏を聞いていた。この地域の文化的関心の高さというものを改めて感じながら、どこまでも続く夜に、伝説の帚木を夢想した。遠くから見れば箒を立てたように見えるのに、近寄るとどこにあったかわからなくなる、そんな木がたしかにこの場所には生えていそうであった。

3日目 緑の飯田・下伊那

9月30日(土)

朝食 みんなのいえ

朝 散歩 阿布知神社、長岳寺

午前 森のようちえん 野あそび保育みつけ

見学 10時～

昼食 丘の上 ひらのや

午後 柳田國男館 見学

午後 果樹園見学 松川町・寺沢農園 14時～

寺沢圭子さんのお話

伊賀良 17:21 ～ 大阪梅田 21:57

農協牛乳と牛乳パン、食べるヨーグルトと飲むヨーグルト、丸いメロンパンと四角いメロンパンからなる朝食を済ませて、朝の散歩に出かけた。よく晴れて気持ちのいい日だった。長岳寺には山本慈昭住職の像がある。山本は中国残留日本人孤児の問題に取り組み続け、200人以上の孤児と肉親との再会を実現させた人物である。前日に満蒙開拓平和記念館で接した数々の語りと対応させながら、多くの子どもたちが大陸に置き去

りにされた時代を思い、「中国残留孤児の父」の遺徳をしのいだ。孤児の肉親との再会支援に生涯を捧げた山本が1990年に亡くなったのは、満州移民に関わる記憶が歴史化される過程の節目の一つであったのだろう。

この日の午前中に学生の希望もあって訪れたのは、認定こども園「野あそび保育 みつけ」である。森の中のびのびと幼児教育を行うことを目指す「森のようちえん」は近年広がりを見せており、この園でも外の森に子どもたちの遊び場がたっぷり用意されていた。木と木の間に渡されたターザンロープ、張り巡らされたアスレチックで縦横無尽に駆け回る子どもたちは本当にいきいきとしていて、私たち大学生も夢中になって一緒に遊んだ（むろん子どもたちの元気さには完敗だった）。私は後からこのようにお伝えした。

子どもたちと遊んでいるとあっという間に時間が経っていました。森の中で子育てをしたい、というのはある意味あこがれですが、それが本当に実現することも園があるんですね。のこぎりや釘といったものも小屋の中に置かれていて、子どもたちが好きに手に取ってよいことに最初は驚きました。しかし、「そこにいたらターザンロープに乗ってきた子とぶつかるからあぶない」など、子どもたちが私たちに注意してくれる様子に、先生方の指導を受けながら、自分たちでまわりを見つづ遊べるようになっていたんだなあと思嘆しました（上垣皓太郎）。

こども園のそばにある、義民・佐倉惣五郎ゆかりの佐倉神社を訪ねたあと、柳田國男館を見学した。それにしても本当にミュージアムの多い地域である。柳田國男館は、飯田・下伊那地域と柳田との関わりを紹介している施設で、書斎などを含め、館内まると柳田邸の雰囲気やいまに伝えている。安岡先生は「こう建物全体から『勉強なさい』と言われている感じがするよね」とおっしゃっていた。先生の研究者交流サイト「research map」のプロフィール写真（2024年3月現在）は、この館内で撮影したものである。

その後松川町まで移動し、寺沢圭子さん・茂春さんのご案内のもと、寺沢農園を見学した。飯田市街方面を見

下ろす高台は「増野原」といい、戦後開拓地である。茂春さんの母・テツコさんは満州から逃げ延びて帰還し、のちに「山でした。(略) 私たちのところは山や原野だった」と回想するような未墾地を切り拓いて苦心のすえ果樹園とした〔満蒙開拓を語りつぐ会 2010〕。現在は、梨、栗など多くの果樹・野菜を育てる農園として経営されている。圭子さんの人柄に私たちはすっかり魅了され、洒落な語り口、たとえば「夏のネギは所詮ネギ！冬のネギはもっとおいしい」とか「農園はここまで。とどめのネギ！」とかはいまも記憶に残る。ネギのみならず、深い紅色をした秋映というりんごやマンシュウヤマブドウを収穫させていただき、わいわい楽しんだ。そのかたわらで、農業や生活に関わるさまざまなお話もうかがった。これまでは梨を受粉させるための専用の木からずっと花粉を採取してきたものの、労力や採算を考え、販売されている外国産の花粉を部分的に買うように切り替えたという。「農業だけだとカサカサしちゃう」と、組合やご友人との活動にも取り組んでうるおいのある人生を生きようとされている様子には感動した。平井さんも、寺沢さんとの出会いに特別な感慨があったようだ。

梨を自分で採って丸かじりする経験も、りんご狩りの経験も、大きなおおきなネギを土から引っっこ抜く経験も全て、私にとって初めてのことでした。そして何より、実際に果物や野菜を育てておられる農家の方に、農園を案内していただき、貴重なお話を伺えたことは、もちろん初めてで、私にとってかけがえのない経験になりました。実際に農園を歩かせていただくことで、文章や写真だけでは決して感じるこのできない空気を吸うことができました。

寺沢さんのお話を伺うことで、私はこれから大学を卒業し社会に出てから、「仕事だけ」、「家庭だけ」、「〇〇だけ」、で1日24時間を過ごすのではなく、自分からアンテナを張り、輪を作る人間であり続けたいと強く感じました。大学4年生というこのタイミングに、寺沢さんと出会えたこと、お話できたことを、本当に喜ばしく思います(平井彩翔)。



図3 とどめのネギ
(2023年9月30日 上垣撮影)

こうして私たちは、充実感と心地よい疲労に浸りながら、緑に囲まれた飯田・下伊那を離れた。帰り着いた石橋のローソンに、長野県産の秋映が売られていて、偶然のめぐり合わせを感じた。お会いしたお一人お一人、地域に生き、歴史の中において、そして不断に学ぼうとしている姿が印象的だった。将来こういう人になれたらと思わずにいられない。だれかに会いに行き、声を聞き、応答して、関わり合うことで、認識を新たに生き直せる——そんな「学び」の基本的価値を確かめる旅ともなった。旅の間でお世話になったすべての方々、そしてこの旅をコーディネートいただいた安岡先生に深く感謝申し上げます。

参考文献一覧

- 図書館問題研究会長野支部 2023「齊藤俊江さんに聞く『我が青春の図書館』【電子書籍改訂版】」図書館問題研究会長野支部
- 満蒙開拓を語りつぐ会 2010「下伊那のなかの満州聞き書き報告集8 満蒙開拓を語りつぐ会報告集」飯田市歴史研究所
- 山本めゆ 2021「〈満蒙開拓平和祈念館〉過去と対話する下伊那の歴史実践」『なぜ戦争体験を継承するのか——ポスト体験時代の歴史実践』蘭信三・小倉康嗣・今野日出晴編著 みずき書林
- 吉田伸之 2015『地域史の方法と実践』校倉書房

読売新聞 2023 「元 7 3 1 部隊員証言 展示巡り協議
飯田市教委、4 回目＝長野」2023 年 11 月 10 日付
記事

注

1 この点をめぐって、ある研究者が新聞からインタビューを受けた記事に「(満蒙開拓平和記念館の展示には) 満州に渡った移民は現地の人の土地を収奪した」と示している、といった内容が掲載され、それについてクレームの電話がかかってきた事例があるという。